

国立国語研究所学術情報リポジトリ

隠岐弁の魅力

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002495

「隠岐弁の魅力」

友定 賢治

(司会) では最後に、県立広島大学名誉教授の友定先生に「隠岐弁の魅力」という題でお話をお願いします。よろしくお願いします。

(友定) こんにちは。友定と申します。よろしくお願いいたします。私は「隠岐弁の魅力」という題で話をさせていただきます。先ほどの平子さんのような若い方が、この出雲とか隠岐とかの方言を一生懸命勉強してくださっていて、本当に皆さんが普段お使いの何でもない言い方が、研究者の立場から見ると非常に重要な言い方であったりということをお感じになったのだと思います。私も同じような話の一部ありますけれども、隠岐弁の魅力として感じていることを話して、それを平子さんのような若い方の研究に託したいというような気持ちでおります。

まずこの隠岐を含む方言は、さっきもちょっと出てきましたけど、雲伯方言という言葉で呼ばれていますけれども、出雲の「雲」と伯耆の「伯」で、ここですね。日本の方言を分けたらこういった形で、隠岐の方言というのは、出雲とか伯耆と同じような特徴を持っているとされています。ただ先ほどの平子さんの話のように、出雲とまったく同じではないということは当然なんですけれども。

例えば、ちょっと文字が小さくてすみません、これは広戸惇先生の「中国地方五県言語地図」という非常に重要な資料です。その中で、「茶も出さん」という言い方をどう言うかという調査をされていて、出雲、伯耆の部分と隠岐とが、同じ記号が付いていると思います。「茶ダエ出さん」とか、「茶ダイ出さん」とか、そういう言い方です。雲伯方言という言い方ができるという1つの例ですね。

ただこういうものがすべてであれば、隠岐をわざわざ調べる必要もなく出雲だけを調べれば



ばいいとか、逆に出雲を調べる必要もなく隠岐だけ調べれば分かるんだということになるんでしょうけれど、当然そういうことはありません。隠岐方言には隠岐方言らしさがあり、私はその魅力として3つの点を挙げたいと思います。1つは独自性。出雲とは違う隠岐独自のものがあるという点。それから日本海側の交流とい

いますか、そういうものを立証できる資料として、方言が考えられるということ。それから先ほどの平子さんの話の最後の方にありましたけれども、東日本の方言と非常につながりという

か、関係とか共通性が高いといった側面。そういう面を取り上げてみたいと思います。

まず独自性です。これもすみません、ちょっと文字が小さいんですが、ここに「雨が降るけれどもこうこうだ」という、「けれども」というところをどう言いますかという地図です。雲伯地方はこの丸のような記号が付いていますが、隠岐はこの縦の線が付いています。雲伯とは違って、島前、島後にほぼ同じ言い方があります。これは「ダイド」とか「ダエド」という言い方です。「ダイド」とか「ダエド」という言い方は隠岐に特有で島前、島後とも共通した同じ言い方があるということです。こういうものが当然「ダイド」以外にもあるということになります。

あるいは、これは海士町で3年前に聞きました。魚のうろこのことを「ソブ」と言うんだと聞きました。ほとんど聞いたことがなかったので、「日本言語地図」という、日本全国を、2,400地点ぐらい調査をした資料があるんです。それで見ると「ソブ」という言い方をするのはこの海士町だけです。非常に特徴的な言葉だと思います。うろこのことを「ソブ」ですね。これ、ご存じの方はいらっしゃいますか。「ソブ」。じゃあ、島後の方では言わないんですね。島後で聞いたのはやっぱりうろこでしたから、島前の方の特徴的な言葉ということだと思います。

じゃあ、うろこは何だろうかというのを同じ地図で見ますと、これもちょっと地図自体は薄くて見づらいんですが、頭のふけのことを「うろこ」というのが記号として付いています。九州のこのあたりにも同じような記号が付いています。ほかにはありません。これはご存じですか。ふけのことを「うろこ」。

これも古い言葉のようです。平安時代の辞書に、頭のふけのことを「イロコ」という言葉で書いてあります。だから平安時代にはふけのことを「イロコ」と言って、「い」が「う」に変わったのはおそらく室町時代といわれていますけれども、そのときと同じふけのことを「うろこ」、「いろこ」という言葉が隠岐に残っているというのがこの地図で分かります。

それから、これを「日本言語地図」で、やっぱり島前の知夫村だけにあるようなんですけど、「いなずま」、「いなびかり」のことを「イナツルビ」という言葉が載っています。これも非常に興味深いのが、1つは、いなずまの語源というのは、稲の妻、夫で、電光が稲に当たると稲が妊娠してはらむ。米ができるという言い伝えがあると思います。つまり、いなびかり、電光というのは稲の夫、妻と考えられていたということをよく表しています。「つるむ（連む）」という言葉がありますね。それが使われた言葉。それがその知夫村にあって、「日本言語地図」で見ますとここだけにしかないようです。非常に特徴的な言葉だと思います。

あるいは、これは一般的に聞きますけど、行かないの、「行かノ」とか、「読まノワ」とか、こういう「ノ」の形で共通語の「ない」に当たる言い方を言い表す言い方、これも非常に特徴的な隠岐の言い方だと思います。

あるいは、これはどこかで聞いた言い方で、「あの人は昔先生だったチョ」とか、「明日は雨だチョゾ」という言い方が、これも2年前ぐらいに聞いたんだと思うんですけど、これは言われますか。

(会場) 言います。

(友定) この「チョ」という言い方。これ何でしょうね。次はさっきもちょっと出てきたんですけど、「イモカカンジャロー」とか、海士町に行くと「エーモデカケシェン」とか、こういう言い方がありますよね。この言い方が時代をさかのぼってみると、例えば源氏物語に「人のそしりをもえ憚らせ給わず」という、「え何々せず」という平安時代のものに頻繁に出てくる言い方です。それが残っているんですね。共通語では「えも言われぬ気持ち」という、かすかに残っている言い方がありますけれども。

さっき最初のお二人の話の中に出てきた、「イモダ」とか「エモダ」という形で言いますね、できないというのを。こういう言い方も共通語とかではできない、えも何々せずの「え」の部分だけを取り出して「イモダ」とか「エモダ」で、だめだという意味に使っています。これも非常に特徴的な使い方だと思います。

それで、「えも何とか」というのは伯耆が同じこの傘のようなマークが付いていますが、出雲の方にはそのマークがなくて、山陽側にあるんですね。山陽側と隠岐とが共通した、「えも何々せん」という言い方です。出雲の方に三角形の記号が付いているんですけど、これは「よう何々せん」という、「よう」という言い方ですね。隠岐と山陽側とが一緒に、出雲が違うという例ですね。

それから、これはさっき平子さんの話の中に出てきたんですが、「殺虫剤をかけたテヤ、ゴキブリはじきに死ぬジャラー（～かければゴキブリはすぐに死ぬだろう）」という言い方。これを、「かけたテヤ」という言い方ですね。こういう形である条件というか、そういう言い方をするのも非常に特徴的な言い方だと思います。「この薬を飲んだテヤ、痛みが治まるわ」という、「飲めば」ですね。都万と書いてありますが、これはこの村上さんに教えてもらった言い方です。

こういう「かけたテヤ」というこの条件の言い方も、全国を調べた資料を見ると、これと同じ言い方が全国にほかにはちょっとないような気がするんですね。やっぱり非常に特徴的な言い方だと思います。「テヤ」がどこから来たものかということが分からなくて、今知りたいところですよ。

あるいは「殺虫剤をかけリヤ、ゴキブリはじきに死のルジャラー」の「かけリヤ」というのと「かけたテヤ」というのと、少し意味的なニュアンスが違うんだという話を昨日伺いました。「かけたテヤ」と言うと、そう言えばゴキブリはすぐ死ぬというのは、「かければ」の後に「そう言えば」という言葉を入れると、共通語で一番ぴったりくるんじゃないかなということも昨日教えていただいたんですけども、この「かけたテヤ」という形もこれから勉強していきたい形です。ぜひ皆さん、こうだということがありましたら後で教えてください。

それからこれは出雲と隠岐との違いで、こんなこともありますよね。「何々なりました」というのは、これは両方ともたぶん「ナーマシタ」ではないでしょうか。「何々するつもりだ」というのは、出雲は「ツモーダ」という伸ばす音ですけど、こちらでは「ツモツダ」という、こういった音になりませんか。「何々するツモツダ」。あるいは「犬帰るのか」というのが「エノーカヤ」と出雲は伸ばすと思うんですけど、「エヌツカヤ」「エヌツカノ」と、この詰まる音になる。これは島前の方に多いかもしれないんですけど、こういう詰まる音になるのが出雲とは違う形かなと思います。

さっきのように、隠岐弁とひとまとめにはできなくて、島前と島後で違いますし、この表のこの形が隠岐のすべての地域で使われているとは思いませんけれども、「えぬっかの」というのは、これはもしかすると島前で特徴的なものかなという気がしています。

次は、同じようなことですけど、「何々している」、今手紙や年賀状を書いている最中だというときに、島後の方、こちらではたぶん「書いチョル」という方が中心だと思いますよね。島前に行くと、「書いチョル」も聞くことは聞きますけど、「書いトル」の方が多いような気がします。「チョル」は少ないような気がします。出雲も、「書いチョル」と「書いトル」というのは両方とも使うというところが多いような気がします。

こちら、書き終わっている場合、もう手紙を「書いチョル」、年賀状を「書いチョル」、ここは「チョル」、こちらもやっぱり「トル」が多くて、出雲に行くと両方とも使うというような感じだと思います。島後と島前で少し「チョル」と「トル」の使い方が若干違うという気がしています。この辺も間違っていたら教えてください。

それから、さっきもちょっと出てきたものですが、あっ、雨だというのは、これは隠岐と出雲では「雨だ」だと思いますよね。山陽側に行くと「雨ジャ」という言い方になります。雨だった、となると「雨ダッタ」とも言うし、「雨ジャッタ」とも言われると思います。出雲は「雨ダッタ」だけです。山陽側は「雨ジャッタ」です。

「雨だろう」になると「雨ダラー」とか「雨ジャラー」というように、「ダラー」も「ジャラー」もこの島後では使われると思います。出雲に行くと「ダラー」だけです。山陽側に行くと「雨ジャロー」、「ラー」ではなくて「ロー」となります。この辺も隠岐が「ジャ」を使ったり「ダ」を使ったり、出雲と山陽側の両方のような特徴がここにあたり、あるいは出雲と同じように「ダラー」と「ラー」になるのは山陽側では聞けません。その辺も特徴的なところかと思っています。

ここまで出雲とかあるいは島前、島後の若干の違いとしてこれまで勉強したところで、こういうことかなと思うことを少し見てみました。隠岐の言葉を勉強していると、隠岐の言葉が日本海側に広く分布しているという、そういう特徴を見ることがあります。あるいは東日本に言い方が、西日本では隠岐や出雲だけに限定して存在するというものもあります。この辺がこの地域の方言の非常に特徴的な1つの姿だと思いますよね。

例えば、これは漁師さんが使う言葉でしょうが、「あゆのかぜ」とか「あいのかぜ」という言葉があります。この言葉は黒い丸が付いてある地域で使われる。それはほとんど日本海側です。この「あゆのかぜ」という言葉ですが、室山（敏昭）という先生は、出雲族の起源というのは縄文時代に南シナ海沿岸の華南地方からやってきた海洋民で、その人たちが使っていた「アユ」「ヒカタ」「ハエ」という風の名前はオーストロネシア系の言語の残存、すなわち縄文語の貴重な遺存を示唆するということを書いています。「あゆのかぜ」という言葉、それが非常に古い言葉の名残ではないかということを言われています。

こういう言葉が古くからの言葉だとすると、それが日本海側ですつとこのように使われるというのは、日本海側をそういったウミンチュたちが行き来した、その跡が残っているのかなということですね。ただ出雲とか隠岐で「あゆのかぜ」というのは今あまり使わないかもしれないですよ。ところが富山県あたり、北陸に行くと、「あゆのかぜ」というのはまだよく使われ

ています。

北陸新幹線ができて在来線が第三セクターになって、その在来線の名前に「あいの風 とやま鉄道」というのを付けていますね。その「あいのかぜ」というのはこの「あゆのかぜ」のことだそうです。こういう日本海側に分布している言葉、これはもしかすると非常に古い言葉で、日本海側を行き来した、交流があったその形跡だろうということを示すものかもしれません。

そういうものは、例えばこれは出雲地方で特徴的な古墳の前の形、弥生の末期ぐらいにできた、この四隅がこういうふう飛び出たような墳丘墓です。これは四隅突出型墳丘墓という名前が付いていると思いますけど、古墳時代と弥生時代の真ん中というか、中間といいますか、弥生の末期ぐらいからだろうと思います。この形のこういうものが出雲の土地でできたようなんですね。そしてそれが北陸あたりにも見いだせると。これは、ここでできたこういう形のものが、ずっとこっちに伝わっていったことを示していると説明されると思います。

さっきの「あいのかぜ」のような言葉も、あるいはこういった墓の形も、出雲あるいは隠岐のあたりから日本海側を通して、当時の越の国というか北陸の方にさまざまなものが伝わっていった、日本海側の交流というものを示す、ここで墓の形、あるいは言葉も同じように考えてもいいたらうと思います。

この『しげさ節』の由来というのをネットの中で調べると、こんなことが書かれていました。越後方面に伝承されている盆の歌、「しゅげさ」が元唄だと。それが江戸の中期から後期にかけてこちらに伝承して、「しげさ」となったんだということが書かれているサイトがあります。これなんかも、北陸の方の民族なり、文化なりがこの出雲や隠岐に伝わってきた、この通りだとしますと、そのようなものとして受け取れます。

こういった民謡、文化、あるいは墓の形、そういうものと同じように、言葉も日本海側を行き来したことを表す、その証拠になるようなものが今の隠岐、出雲の方言にあるということだと思います。

さらに、これはタケで編んだ、こういったものですよ。それを「そうき」という言い方、これは今でも皆さんされますか、「そうき」。これが『日本国語大辞典』という大きな辞典で、方言としてはこういうところで使われているとあるんですね。鳥取、島根、隠岐、岡山、広島比婆郡、そして沖縄とあるんですね。ただ、その音の形が少し変わった形としては九州にありますから、沖縄から九州、そして岡山県や広島県の比婆郡、中国山地とか、山陰とかにこの言葉があると。

そうすると、これも沖縄からずっと九州を伝わって、隠岐とか出雲に伝わってきたという、その可能性があります。これなんかも、日本海側というのが沖縄を含めた形で、交流あるいは文化の流れがあったことをうかがわせるのではないかなと思います。

また、この牛突きですよ。これもどこで行われているか、牛突きのサミットというのがあるんですけど、沖縄はいろいろなところであって、それがやっぱり九州の方から、ここであって、新潟県にあって、岩手県の久慈とかこの辺にあって、沖縄からやっぱり日本海側にずっとこの文化があるような気がします。宇和島とか、そこにもあることはあるんですけどもね。この牛突きという文化ももしかすると、そういう沖縄、九州、あるいは日本海側を流れていった文化の1つということになるのかなと。

そうすると、さっきの『しげさ節』の由来とか、あるいは「そうき」という名前のものとか、そういうものに含めて、沖縄を含めた日本海側交流といったものが隠岐の言葉として考える要素、隠岐の言葉の位置付けを考える要素として必要になるかなということ进行を思います。平子さんが最後に言った、隠岐の方言の位置付けというとき、言語以外のこういう文化とか、そういうものと同時に、日本海側の交流といったものを考える必要があるだろうということ进行を思います。

次は東日本と一致するものとして、「イ」と「エ」の区別が非常にあいまいだという地域です。東がこの地域で、非常に広くそうなっていますが、西はここだけですよね。「イ」と「エ」の区別がなくて、「イキ」と「エキ」の区別が非常に難しいとか、そういうところがこの地域とここです。東に分布しているものが途中になくて、出雲、隠岐にあるというものですよね。

これはちょっと文字がぼやけた感じがすみません。「今日はいい天気だ」の「だ」のところをどう言いますかという地図で、東は全部「だ」ですよね。「いい天気だ」。その「だ」というのがあるのが、西ではこの山陰です。「だ」という形、山陽側の赤いのは「ジャ」です。「雨ジャ」です。「ええ天気ジャ」ですね。これも東のものがこの地域にあるということだと思いますね。

それから、さっきもちょっとお二人の話に出てきた「おじ」と「おば」ですよね。次男以下の男子をまとめて「おじ」と呼ぶ。もっと「すておじ」とか、そういう言葉もあるようですがけれども、これも東日本には、東北から関西にはずっと存在している。だけど関西より西では、島根県の隠岐と徳島とあります。次男以下の男子をまとめて「おじ」という言葉は、西では本当に限られたところしかない。「おば」もそうですよね。それが隠岐です。東の文化とか、東のもしかすると家の制度、そういうものと似通った面があるのかもしれない。これなんか、家族の制度とか、そういうもの等を含めて考える必要がある問題かもしれない。

それから、ここに「シヨウシナワア」というのがありますよね。ちょっと文字が見えづらいかもしれません。これは「恥ずかしい」ですよね。恥ずかしいという意味で「シヨウシ」というのを使っているのは、辞典で見ると、青森、岩手、秋田、宮城、新潟、富山です。別の意味では、ありがとうといった意味でも使いますが、恥ずかしいという意味で使うのは東北と北陸とここですよね。東日本、それから北陸にちょっとあって、ここの隠岐、出雲にあるといったように、東とここが非常に共通性が高いということです。

以上のことを含めて言いますと、隠岐弁の魅力は、まず独自性、一つ一つの単語についても言えるでしょうし、「カケタテヤ」とか、ああいった表現の仕方もあるでしょう。また、日本海側の交流、出雲から北陸の方に、あるいは北陸から出雲に、あるいは沖縄も含めて考える必要があるものが見いだせるかもしれないこと。それから東日本にあるもので出雲とか隠岐に特徴的に見られるもの、このようなものが魅力としてあげられます。

こういった側面を、すべてもっと正確に、きちんと勉強、研究していくのが、私の世代とは違って、さっきの平子さんたちの世代にぜひやってもらいたいと思っている事柄です。

ここからちょっとすみません、別の話になりますが、そういう魅力的な隠岐の方言ですから、ぜひ活用してほしい、あるいは残して欲しいということなんです。今の隠岐の人口は10月で2万393人となっています。島根県の全体ですけど、高齢化率が32%だそうです。そうすると隠岐島で高齢者の数が約6,500人ぐらいということになります。

今、高齢者 65 歳といっても、もう団塊の世代がそこに入ってしまうから、戦後生まれも入ってしまうよね。戦後生まれを除くということになると、これはもしかすると 5,000 人台かもしれません。それぐらいの人が、いわば従来からの隠岐弁、隠岐の方言を使っている人だとしますと、5,000 人から 6,000 人という人数です。1 万人には到達していない数ですよ。

変な話ですけど、島根県の統計でいいますと、隠岐島全体で 1 年間の死者数といった統計もあるんです。何人死んでいるかという、それでいいますと、去年は隠岐島全体の死者数が 353 人です。もちろん高齢者だけではないですけども、高齢者が中心だとしますと、300 人ぐらいの方が亡くなられるとして、話す人が 5,000 人から 6,000 人だとしますと、今のような形でいけばあと 14~15 年ぐらいで、今のような方言を話す方々が代替わりしてしまうということになります。そこで、活用や伝承ということをぜひ考えていただきたいということです。

これは港のところにあるものです。「ゴザイナ」。皆さん、これに気付いていましたか。こういうのがあります。小さく「ゴザイナ」と書いてありますね。それから、その港のところの立ち食いの「ガイナ」というお店、店の看板です。それからこれは、ぶらり散歩というものにきてくださいというポスターですが、「参加をまっチョルケン、アンキシテゴザイナ」。「アンキシテ」という言い方なんですよ。こういったところにも少し方言が使われています。

あるいは、「月あかりカフェ 秋のもよおし」。いい名前ですよ。そこに「季節のコジャセット」、さっきもありましたね。おやつ。それから、「隠岐の島アンヤラーズ」、これもさっきお二人の話にありましたが、長男のことで、そのチームが全員長男だったので「アンヤラーズ」と名付けたという、このような方言を利用したものもありました。「MAMEDAGIA」。これは音楽の祭典ですかね。そういうもの、これも方言ですよ。

ただ、ちょっと方言の使い方が控えめ過ぎる。もっと大胆に方言をいろいろなところで使ってほしいという気がします。東京から来てここにいる、若い中西君という人が、隠岐に来て空港に降りて、そこで方言で書かれている言葉があるのかと思ったけど何もなかったと。あるいは、ほかのところで方言を使ったものを何か写真に撮りたいんだけど、それがどこにも見つからないということを昨日言っていたんですよ。隠岐島の中で、さっきのようにちょっとしたところに方言があることはあるんですけど、もうちょっと何か方言をアピールしてもいいんじゃないかという気がします。

例えば、よその土地でいいますと、平泉、「ようござりしたね」。善光寺、「おいでなして善光寺さんへ」。山形県、「きとごやっておしょうしな」。この「おしょうしな」は、ありがとうという意味で使っています。富山県、「立山に来られ」。広島県、「みんなきね」。みんな来てくださいということです。奄美大島、「いもりんしょーれ」。石垣島に行くと、「おーりとーり」。これは空港ですよ。どーんと、こんなに大きく張ってあります。

こういうものに比べると、西郷港のフェリーの着くところ、「しまねにようこそ」なんですよ。何かちょっと拍子抜けしてしまうんですよ。ここに方言でどーんと大きく書いてもらおうと、本土から来た人とか、いろいろなところから来た人が、ああ、島に来たなという感じになるかもしれないですよ。「しまねにようこそ」ではちょっと何か物足りない気がします。

もう 1 つは若い人にぜひ方言を伝えてほしい。その意味で、この海士町立福井小学校

のホームページの中に、海士の方言というのがあります。海士弁、さっきもありました「アーエ」とかがあって、共通語がこれで、用例がこのように書いてあって、この用例は音声付きなんです。発音しているのがこのホームページで見えるんですよ。

小学校の子供たちは、今パソコンなんかは自由に使えますから、このサイトで海士の方言を自分でクリックすれば、海士の方言が音として聞けるんですよ。この小学校の取り組みは非常に優れたものだと思うんですよ。ぜひこれは続けていってほしいと、海士の福井小学校の方にはお願いしたいし、ほかのところでも、小学校でこういうことは可能だと思いますよね。

今、どこの小学校もホームページを持っていますし、子供たちが自由にパソコンを使えますから、音声とか動画、映像などそういうものを組み込むことも非常に簡単です。それらを通して、子供たちが自分たちのおじいちゃん、おばあちゃんの世代の方言を聞いたり、見たりすることができるという仕組みを学校でぜひつくってほしいということを思っています。

これはちょっと前ですけど、島前高校に酒井薫美先生がいらっしゃったときに、こういう民話を高校生たちが、隠岐の島前だけではなくていろいろなところで集めています。これは都万村のもので。自分たちで集めて、自分たちで文字化して、それを報告集として、このようなものを何冊か作っています。これもすごい労作というか、立派なものだと思います。こういう形で高校生たちに、おじいちゃん、おばあちゃんの方言や昔話、民俗、文化などが伝わっていくんじゃないかと思います。

最後はお願いします。全国の重要な方言を記録する国立国語研究所の事業で、本年度から平成32年度までの5年間ですけれども、そこに書いてある4人の者がこの出雲や隠岐を担当しています。これから5年間ですけれども、この4人の者がいろいろなことを教えてほしいと皆さんのところへお願いに行くと思いますので、ぜひご協力をよろしくお願いいたします。ありがとうございました。(拍手)

(司会) どうもありがとうございました。皆さんも最後まで聞いてくださってありがとうございました。もう特にご質問の時間は設けておりませんので、ぜひ、ここが違うよということがあったら、直接友定さんや平子さんにお話しただければと思います。今日は本当にどうもありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。(拍手)